



高層ビルが立ち並ぶオフィス街の一角に建つ平将門の首塚（東京都千代田区大手町）

功を挙げた千葉常胤は、陸奥国宇多郡・行方郡を拝領し、のちの相馬氏の祖となっている。

戦国時代に奥州の覇権を争った東北地方の戦国大名は、奥州藤原氏滅亡後、この地に根を張った御家人の流れを汲んでいるのである。



板東に散った荒ぶる新皇 平将門の首塚にまつわる怨念とは？

関東を支配下に治めて自らを「新皇」と名乗り、朝廷に叛旗を翻した平将門。

将門は天慶3年（940）に朝廷の追討軍に敗れて討ち死にし（承平天慶の乱）、その首ははるか平安京まで運ばれた。七条河原で晒された将門の首は、まるで生きているかのように目を見開き、歯ぎしりをしているようだったという。その後、将門の首はもらい受けた人々

によって武蔵国豊島郡芝崎村の観音堂に埋葬された。伝説では、晒されていた首が3日目に夜空に舞い上がり、故郷の方角に向かって飛んでいった。その首が落ちたのが武蔵国の芝崎村で、村の人々はその首をねんごろに葬って首塚をつくったとされる。

以降、この地には長らく将門の首塚が鎮座することになった。そして「将門の怨念」といわれる伝説が現在へと引き継がれていく。

中世になると、武蔵国豊島郡は江戸氏の勢力下に入った。しかし、将門の首塚を荒廃させると地域に災いが起こったため、江戸氏はそれを「将門の怨念」と考え、鎮守社を建立して鎮魂した。やがて徳川家康が東国入りし、江戸の町が開かれると、この土地は家康の重臣・酒井家の屋敷地となった。

承平天慶の乱
承平・天慶年間（931～947）に関東の平将門の乱と、瀬戸内海の藤原純友の乱がほぼ同時に起こったため、この2つ

の反乱を合わせて承平天慶の乱という。この2つの反乱は律令国家体制を大きく動揺させたとともに、地方武士の台頭を予感させた。